

寺田寅彦

子規の追憶





# 子規の追憶



子規の追憶に就いては数年前ホトトギスにローマ字文を掲載して貰ったことがある。今度此れを書くのに参考したいと思つて搜したが、その頃の雑誌が手許てもとに見当らない。兎とに角かく同じような事を二度は書き度くないから、前に書かなかつたと思うことだけを記すことにする。

## 一

自然科学に関する話題にも子規は可成の興味を有もつて

居たように思われる。当時自分は訪問してそういう方面のどんな話をして居たかは思い出せないが、ただ一つ覚えて居ることがある。或時颱風たいふうの話から其のエネルギーの莫大なこと、それをどうにかして人間に有益なように利用するようになりたいというようなことを話したら、大変にそれを面白がった。暴風の害を避けようというのでなくて積極的に其れを利用するというのは愉快だと云って喜んで居た。

写生文を鼓吹こすいした子規、「草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に写生して居ると造化の秘密が段々分つて来

るような気がする」と云った子規が自然科学に多少興味を有つという事は当然であつたかも知れない。

『ぎようがまんろく仰臥漫録』に「顕微鏡にて見たる澱粉の形状」の図を貼はりこ込んであるのもそういう意味から見て面白い。

兎に角、文学者と称する階級の中で、科学的な事柄に興味を有ち得る人と有ち得ない人とを区別する事が出来るとしたら子規はその前者に属する方であつたらしい。此の事は子規という人と其の作品を研究する際に考慮に加えてもいいことではないかと思う。

## 二

学芸の純粹な進展に対して社会的の拘束が与える障害に就いて不満の意を洩らすのを聞かされた事も一度や二度ではなかつたように記憶する。例えば美術や音楽の方面に於て所謂官学派いわゆるの民間派に対する圧迫といったようなことに就いて、具体的の実例をあげて所謂官僚的元老の横暴を語るのであつたが、それが唯冷静な客観的の噂話でなくて、可成興奮した主観的な憤懣ふんまんを流出させるのであつた。どういふ方面からそういう材料を得て居たか又其の材料がどれだけ真に近いものであつたかは自分に



は全然分らない。併し故人がそういう方面の内幕話に興味を有ち、又そういう材料の供給者を有って居た事はたしかである。

子規は世の中をうまく渡って行く芸術家や学者に対する反感を抱くと同時に、又自分に親しい芸術家や学者が世の中をうまく渡る事が出来なくて不遇に苦しんでいるのを齒痒はがゆく思つて居たかのように私には感ぜられる。

### 三

或時西洋の小説の話から始まってゾラの『ナナ』の筋

も私に話して聞かせた。それから、何という表題の書物であつたか、若い僧侶が古い壁画か何かの裸体画を見て春の目覚めを感じるといふ場面を非常にリアルな表現をもつて話して聞かせた事があつた。その時の病子規は私には非常に若々しく水々しい人のように感ぜられた。

私は『仰臥漫録』を繙ひもといて、あの日々の食膳こんだての献立けんりつを読む事に飽きざる興味を感じるものである。そうしてそれを読みながら、又どういふわけか時々このゾラの小説の話の思い出すのである。

ほとんど腐朽ひんに瀕ひんした肉体を抱えてあれだけの戦闘と

事業を遂行した巨人のヴァイタルフォースの竈かまどから  
ほとばし迸る火花の一片二片として、こういう些細ささいな事柄もい  
 くらかの意味があるのではないかと思われるのである。

#### 四

子規の家から不折氏の家へ行く道筋を画いて教えてく  
 れたものが唯一の形見として私の手許に残って居る。そ  
 れは子規氏の特有の原稿用紙（唐紙）に朱罫、十八行  
 二十四字）一杯に画いた附近の略地図である。右上に斜  
 に鉄道線路が二本引いてある。鶯横町は右下半に曲線を

描いて子規庵は長さ一センチ位のいびつな長方形でしるされてある。図の左半は比較的込み入っていて、不折邸附近の行きづまり横町が克明に描かれ「不折」「浅井」両家の位置が記入されている。面白いことは横町の入口の両脇の角に「ユヤ」「床ヤ」と書いてある。それから不折邸の横に「上根岸四十番」と記し、その右に大きな華表とりいを画いて「三島神社」としてある。ずっと下の方に門を書いて、「正門」としてあるのは前田邸の正門であろう。

脚腰の立たない横に寝た切りの子規氏の頭脳の中に可

成明確に保存されて居た根岸の地理の一つの映像として此れも面白いものの一つであろうと思う。此辺も区劃整理で昔の形が消えてしまいかどうか知りたいものである。

今久し振りに此の図を取出して見て居ると三十年前の子規庵の光景がありありと思ひ出される。御院殿坂に鳴ひぐらしくひぐらしの聲や邸後を通過する列車の騒音を聞くような心持がする。

(昭和三年九月)



日本文学電子図書館

---

## 子規の追憶

著 者：寺田寅彦

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系 29  
筑摩書房

昭和46年6月25日 初版第一刷発行



日本文学電子図書館